池田 温先生の思い出

林 俊雄

一九九二年、私は創価大学へ着任してまだ二年目の助教授だったが、その五月ころ、浅田實教授から相談を持ち込まれた。東洋史担当の和田博徳、加藤九祚両教授が、数年後にはご退任になる。ついては後任として、大学院を担当できる業績の豊富な先生を探してくれないか、というのである。

すぐに思いついたのが、池田温先生である。私は大学院の一年生のとき（一九七三年）から池田先生の演習に出席し、その講筵のはしっこに列していた。先生は、東大では一貫して文学部ではなく、東洋文化研究所の教官を勤められていたので、学部の講義はなく、大学院の演習のみを担当されていた。

演習では、先生が長年研究に携わってこられた内陸アジア出土文書の解読と解釈が行われていた。東洋史学界では、伝統的に中国の正史を中心とした刊行史料の研究が主流であった。しかしそれらはみな後に編纂

されたいわば加工品で、同時代の原史料ではない。先生は、遺跡から出土した文書の重要性を認識され、パリやロンドンにある文書を直接ご覧になって写真を撮られていた。また、中国からそのころようやく発表され始めた文書などのコピー・写真版をとりよせ、独自に史料集を作成されていた。それを大学院の演習で開示されていたのである。

その当時、出土文書を専門的に研究する人はまだ少なかった。その中でも池田先生は第一人者とも言える存在であったので、演習には他大学（都立大、明大、お茶大、上智大など）の院生や助手などの若手が、集まっていた。また専門分野も、東洋史だけでなく、日本古代史や、法制史など、ヴァラエティーに富んでいた。とても活気に満ちた演習であった。我々院生が発表するとき、先生はたいてい居眠りをなさっていた。ところが発表が終わると、実に的確な質問をされる。居眠りをしながら肝心なところは聞きのがさないという特技をお持ちだった。私の恩師の一人である江上波夫先生も、やはりその特技の持ち主だった。大家に共通する特技であろうか。

さて、先生は続々と論文・著作・史料集を発表され、日本だけでなく、中国や欧米でも注目される研究者となっておられた。その池田先生が、一九九二年の三月に東京大学を定年退官され、北京の日本学研究センターに主任教授として赴任されていた。池田先生ほど業績のある方を、どうして日本の大学はお迎えしない

のか。当たって砕けろ、というつもりで先生にお手紙を差し上げたところ、創価大学へ行ってもよいというお返事をいただいたのである。私は、たまたまその年、科研の海外調査の一員として夏に中国へ行くことが決まっていたので、詳しくは北京で会ってお話ししましょうということになった。

七月末に北京に到着すると、私は先生が宿舎としておられた友誼賓館に向かった。池田先生は、奥様とともに私を待っていてくださった。奥様はチャイナドレスのよく似合う小柄な女性で、池田先生以上に流暢に中国語を話される。賓館のレストランで昼食をとりながら、気持ちよく話を進めることができた。本来なら依頼を持ちかけた私が昼食代を払うべきところ、先生に払わせてしまいました。申し訳ありませんでした。

その年の秋、当然のことながら教授会で、池田先生の業績審査報告が行われた。審査を担当されたのは、前記の和田、加藤両教授である。加藤教授が、「私には、池田先生のようなえらい先生の業績を審査する資格はありません」というユニークな表現で報告を始められたことを、私は今でも憶えている。私はまだ助教授で、本当の意味で審査する資格がなくて、助かりました。後で聞いた話によると、実は某大学が池田先生を教授として迎えようと案を練っていたらしい。どうもタッチの差で、私の方が先に話をつけてしまったようだ。

そして翌年、一九九三年四月から本年三月まで、十四年間、創価大学の文学部と人文科学研究科の双方で

教鞭をとっていただきました。本当に心よりお礼申し上げます。これからはゆっくり研究だけに専念してください、と言いたいところですが、昨年四月から先生は東方学会の会長に就任されてしまいました。ご存じない方もおられるでしょうが、東方学会は文科系の学会としては最大の規模を誇っているのではないでしょうか。従って、会長も名誉職などではなく、かなりの激務だと思います。どうか、お体にお気をつけて、会務は適当にして、研究にお励みくださり、我々後輩にご研究の滴を垂らしていただくよう、お願いいたします。